

一 般 演 題 抄 錄

1. 治療に難渋した気管支喘息の1例

藤本 知久 田村 公之

医療法人 青松会 河西田村病院

症例は70歳男性，発症年齢は50歳，大発作の既往があり，発作は通年型，IgE (RAST) でHD陽性の混合型の症例です。合併症として心房細動と陳旧性肺結核を認めた。平成8年6月初旬より発作を頻回に認めるようになり，外来で頻回にネオフィリンおよびステロイド剤の点滴治療を行なうも発作寛解とならず，外来治療で経過をみていた。6月24日に口唇チアノーゼと下肢の浮腫を認め，緊急入院となった。入院時O₂ 6/min吸入下でPO₂ 54 Torrと著明な低酸素血症を呈し，ネオフィリンおよびステロイド剤の投与と心不全に対して利尿剤の投与を行ない，入院3日後より胸部聴診上努力呼出時のみ，wheezeを聴取するまで改善した。しかし6月28日再び急激に進行する低酸素血症を認め，オキシメーターのSATはマスクO₂ 10 L/min吸入下でも60%台まで低下した。この時点で治療に難渋した点は，胸痛および血痰を認めず，胸部レントゲン上浸潤影および血管影の消失の所見も認めず，心電図上右心負荷は認めらるが，入院時にも認めており，心電図

上の変化も明らかでなかった。このため肺梗塞および肺塞栓症を示唆する所見に乏しく，直ちに抗凝固療法の開始に踏み切れなかった。その後数時間で更に低酸素血症の増悪を認めたため，ウロキナーゼ24万単位とヘパリン12000単位の投与を開始した。その後時間を追って，低酸素血症の改善を認め，一週間で発作寛解状態となった。今回の症例は発作寛解期の肺機能検査において，FV curveで肺気腫パターンと末梢気道閉塞を認め，肺弾性の低下が示唆された。すなわち，radial traction forceの低下は末梢気道閉塞を生じさせるが，肺構造より考えると肺胞間の間質の微小血管壁に対しても，radial traction forceが作用していると考えられる。従って，本症例において抗凝固療法が著効したことより，微小血管すなわちcapillaryの血流障害が広汎に生じたするとHigh V_a/Qの存在が考えられ，急激な進行性の低酸素血症の病態も理解でき，血流障害の関与も重要であると考えられた。

2. 重症気管支喘息の臨床的検討

村木 正人 東田 有智 久保 裕一 原口 龍太 田中 明 南部 泰孝 植島 久雄
岩永 賢司 仲原 弘 野上 壽二 長坂 行雄 大石 光雄 福岡 正博 中島 重徳*

近畿大学医学部第4内科学教室 *ライフサイエンス研究所

目 的

1年以上ステロイド内服中のステロイド依存性喘息患者を対象に，患者背景，検査所見，治療等について臨床的検討を行った。

対 象

当科 follow up中のステロイド依存性喘息患者，男性17例，女性11例，年齢29～75歳（平均56.1歳）の計28例を対象とした。

結 果

患者背景としては，非アトピー型が多く（85.7%），アスピリン喘息の合併が25.0%と多かった。また，成人発症が85.7%と多かった。喫煙歴を57.1%に認め，他のアレルギー疾患合併は42.9%で，喘息の家族歴を有するものは53.6%であった。入院歴は96.4

%とほとんどの症例にあり，大発作歴は32.1%で認められていた。治療状況は，全例テオフィリン製剤が用いられ，β刺激薬の内服も目立った。BDPは，ほとんどが800 μg/day以上であったが，咽頭部異和感などのために800 μg/day未満の者もいた。BDP以外のステロイド歴5年以上が71.4%であった。検査所見では，末梢血好酸球数増加例が多く，症状の安定期においてもFEV₁ 1.0%の低下を認めていた。ステロイド内服を要しない喘息患者との比較において，気道抵抗は高く，心理テスト（CMI）では，神経症的要因が強く出ている様に思われた。また，経口ステロイドの量が多い喘息患者で血清ECP値は高い傾向にあった。ステロイド抵抗性気管支喘息患者において，その発作時に血清TxB₂の著明な上昇を認め，非発作時においてもなお高値を示した。難治性喘息の病態において脂質メディエーターの関与が示唆された。